

## 二 キリストの日に備えて

　　フイリピの信徒への手紙 一章三節一一節

一〇〇八年一月一日礼拝説教

秋吉隆雄 牧師

みなさん新年明けましておめでとうございます。二〇〇八年の新しい年を迎えるました。今年もよろしくお願ひいたします。この年はどんな年になるのでしょうか。どんなことが起ることなのでしょうか。新年を迎える度に、今年は良い年であつて欲しいと誰もが願います。けれども、年々人々の心の荒廃が進んでいるようにも思えます。魂の劣化などという言葉も使われます。この荒廃や劣化は自己責任的な要素もあるでしょう。特に社会的に地位の高い人々の場合は明らかに自己責任的と言えるであります。しかし、社会のあり方制度や構造がもたらす劣化もあると思います。例えば教育行政、あるいは福祉のあり方また経済構造がすぎんだ状況を生み出すということもあると思います。わたしたちは新聞やテレビの情報を通して、時代のしるしを見ています。その情報は事件や事故の報道が多いわけでありますから、その結果当然、問題ばかりを見せつけられます。けれども、わたしたちの周りでは人と人が結び合おうとして優しく愛に富んだ事柄もたくさんあると思います。それに支えられてこの社会が成り立っていくとも言えると思います。わたしたち教会はキリストの愛を知る者として互いの関係が善に向かって、プラスに向かって進むように努力しています。それは何も教会だけでなく、世の人の多くはそのような願いをもつて実践する中で生きておられると思います。私はそう思いたいし、それが事実でもあると思います。

さて、今年の元旦礼拝に与えられました御言葉は、フイリピの信徒への手紙一章三節から一二節までです。この箇所はまさに愛において結び合つた美しい御言葉が記されている箇所であります。フイリピ書はパウロの書いた手紙であります。パウロと宛先であるフイリピ教会の心温まる愛の関係が嬉しい喜びの言葉で綴られています。今日はこの御言葉から申し上げたいと思います。事情はこうであります。パウロは現在のトルコからエーゲ海を渡つてギリシャに入つてヨーロッパ伝道を始めました。その最初がフイリピであります。パウロが熱心に語るキリストの福音を、紫布を商う職業婦人であつたりディア、また刑務所の看守一家が受け入れてクリスチャンになりました。その後、このフイリピ教会は確実

に成長していきました。パウロは一つ所に長く留まることはなく、トルコ・ギリシャ地方を疾風のように駆け回って伝道しました。ファイリピ教会はこのパウロの伝道活動を強力に支えました。金品を贈り、パウロの苦悩を分かち合っていたのです。このファイリピ書が書かれたのは、パウロが投獄されている時でした。投獄といつてももちろんパウロが何か悪いことをしたわけではありません。キリストの福音を語ったことが町の秩序を乱した。そのために投獄されてパウロの福音宣教が正当な行為であるかどうか裁判をする。そのための投獄です。聖書では「監禁」という言葉で書かれていますけれども、かなり自由を認められた軟禁状態に置かれたわけあります。軟禁状態とはい、裁判によって死刑になることもあります。もあり得るわけです。パウロはファイリピ書の中で、「たとえわたしの血が注がれることでもわたしは喜びます」と、裁判によって死刑が宣告されて殉教することも覚悟していると書いています。また、「この世を去ってキリストと共にいたいと熱望しております、そのほうがはるかに望ましい」と、殉教によってキリストとの出会いを待望しているとも書いています。パウロのこの投獄の事実を伝え聞いたファイリピ教会は、金品を集めてエパフロディトという人にそれを届けさせたのです。

そして軟禁状態にあるパウロをお世話しようとさせたわけです。一応そのことの目的は達したわけですが、肝心のエパフロディトがパウロの傍で死ぬような病気になつた。ようやく回復したのでパウロはエパフロディトをファイリピ教会へ送り返す。その送り返す時にエパフロディトに持たせたのがこのファイリピ書なのです。ですから、パウロとファイリピ教会は長年、深い愛と信頼で結び合つてキリストの福音宣教を共同の使命としていました。そのような中での手紙、これがファイリピの信徒への手紙なのです。ですから大変愛情のこもつた美しい言葉で綴られています。

今日の御言葉、もう一度三節から十一節までを御覧いただきたいと思います。  
「わたしは、あなたがたのことを思い起<sup>シ</sup>す度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもつて祈っています。それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです。あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださいと、わたしは確信しています。わたしがあなたがた一同についてこのように考えるのは、当然です。というのは、監禁されているときも、福音を弁明し立証するときも、あなたがた一同のことを、共に恵みにあずかる者と思つて、心

に留めているからです。わたしが、キリスト・イエスの愛の心で、あなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証してくださいます。わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力を身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによつて与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。」

三節から八節までで、パウロのエパフロデイトに対する深い愛そして感謝が喜びをもつて書かれています。これは過去と現在の状況の言葉です。「わたしは、フィリピ教会のことを思う時に、神様に感謝し、喜びをもつて祈っています。それは、わたしが伝道した初めの時から今に至るまであなたがたはキリストの福音に与つていて。その福音の業を最後まで成し遂げてくれると確信しているからです。わたしがあなたがたのことこのように感謝をもつて考えるのは当然です。わたしの福音宣教のためにあなたがたはたえず支援してくれました。監禁されている今もわたしのことを心に留めてくれています。」パウロにとつて投獄されている時に金品の差し入れとエパフロデイトの訪問はなにより嬉しかつたであります。パウロの福音は喜びの共有だけではなく苦難の共有でもあります。福音宣教のための苦難と共に分かち合つてくれるフィリピ教会は嬉しい存在であります。ですから、「わたしのあなたがたへの愛はキリストの愛と同じで、どれほど深い愛であるかは神ご自身が証してくださいます」と語つてゐるのです。パウロは地球を半周回るほど歩いて伝道し、多くの教会を建てています。けれども教会すべてがフィリピ教会のようにパウロを支援する教会ではありませんでした。例えば、ガラテヤ地方の教会は、パウロの語る福音の自由から、律法主義、戒律主義、民族主義へと陥つて行きました。ですからパウロはガラテヤ書の中で「ああ、ものわざりの悪いガラテヤ人よ、誰があなたがたを惑わしたのか」と叱責しています。また、コリント教会は町の放縱がそのまま教会の中に持ち込まれました。教会が争いで混乱しています。そして、パウロに対する批判、悪口が渦巻いてゆく状況にもなっています。パウロにとつていつも変わらずキリストの福音に立つてパウロを愛し、支援してくれるフィリピ教会は考えただけで嬉しくなるような教会であつたわけです。

そして、今日の御言葉の後半、九節から十一節にかけて、このフィリピ教会が

さらにこうなつて欲しいという将来に対する望みについてパウロは語っています。もう一度九節から「覧になつて頂きたいと思います。「わたしは、こう祈ります。」知る力と見抜く力を身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによつて与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるようだ。」パウロは「わたしは、こう祈ります」と言つて、フイリピ教会が将来、こうあつて欲しい三つのことを勧めています。一つは、岩波訳聖書が分かり易く訳していますが、「あなたがたの愛が知識と感覚において一層深められ、その結果、あなたがたが真に重要なものをわきまえる事」と訳しています。パウロが語る愛は、知識と感覚において深まるというのです。私は愛といふものは感情だけではなくて知性だと思つています。愛は知性が加わつて初めて眞実になつていくわけです。そして、その愛は、眞に重要なこととそうでないを見分けることが出来ると言つています。重要なものとそうでないものとを見極める、これは生きるうえで最も大切なことではないでしょうか。パウロは、「それは、満ち溢れた愛が事柄の真実を判別する」と言つています。これは本當でしよう。知識に裏打ちされた愛が本当に大切なことをわたしたちに教えてくれるわけです。ですから、大事でないことにエネルギーは使わない。これが知恵ある信仰であります。一つ目のこととは、「キリストの日に純真でとがめられるところのない者となる。」このことは、もう一度最後に申し上げたいと思います。三番目は、キリストから与えられる義の実、イエス・キリストの十字架によつて与えられた罪の赦し、神からの義、これを受けた者として神さまの栄光と譽れを讃える。わたしたちはイエス・キリストによつて良しとされています。だれもが神さまによつて是認されている。どのようなかたちであつても、人の目から見て立派であつても立派でなくとも生きよと神さまは宣言して下さつてゐる。ですから、その命を用いて神さまの栄光を、神さまはわたしたちと生きて共におられるということを表わしていくような生き方をするようにと。パウロは勧めています。これがパウロのフイリピ教会の将来に対する希望の言葉であります。今日与えられた聖書の中で「キリストの日」という言葉が二度使われています。私は、今日与えられたパウロのみ言葉の中でこの「キリストの日」という言葉がキーワードであると思つています。キリストの日、これは歴史の終りです。主によつて歴史が完成する日。この日キリストが再臨する。

そして、終末が到来する。ですから、終末の日これを「キリストの日」と聖書は言います。パウロは、この「キリストの日」に備えて、今日の勧めの言葉を書いています。キリストの再臨による終末の日——「キリストの日」——この日が信じられるかということです。クリスチヤンは信じているわけです。この歴史は神が始められたわけですから必ず神が終止符を打たれる日が来る。これがキリストの日であります。これを信じるのです。私は神学生時代、鈴木正久牧師が伝道牧会していた西片町教会に通っていました。その鈴木先生は戦争責任告白を出された後、肝臓癌で大変苦しめて亡くなりました。最後の病床の時に御自分の想いを録音テープに入れておられます。今日わたしたちが読みましたフイリピの信徒への手紙のこの箇所を長女の伶子さんに読んでもらつた感想をテープに取つておられます。その題は「キリストの日に向かって」とタイトルが付けられています。

こういうことを語つておられるのです。「ある夕方、伶子にピリピ書を読んでもらつていた時、パウロが自分自身の肉体の死を前にしながら非常に喜びにあふれてほかの信徒に語りかけているのを聞きました。聖書というものがこんなにいのちにあふれた力強いものだということを、わたくしは今までの生涯で初めて感じたくらいに今感じています。パウロは、生涯の目標というものを自分の死の時と考えていません。そうではなくてそれを越えてイエス・キリストに出会う日、キリスト・イエスの日と、このように述べています。そしてそれが本当の『明日』なのです。本当に輝かしい明日なのです。その本当の明日というものがある時に、今日というものが今まで以上に生き生きとわたくしの目の前にあらわれてきました。」これは亡くなる数日前に語った言葉であります。キリストの日とは死を越えてイエス・キリストに出会う日であります。それは本当に輝かしい明日であつて、この明日を信じるから今日が生き生きと目の前に現れてくるというのです。このキリストの日を信じる信仰は愚かでしようか。教会はこれを終末信仰と言つて望みにおいて今を生きる命と/orしてきました。パウロは「このキリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのないよう」と続いているわけです。もう一箇所鈴木先生の言葉を読みたいと思います。「さてわたくしたちが天国へ行くかどうかということですが、わたくしは神のもと、キリストのもと、聖霊のもとへ行くことはあたり前のようなこととして今まで話してきました。その理由はこうです。それはわたくしが立派であるとかないとかいうことと全然関係がありません。おかしなことを言うならば、わたくしのようなものを天国へい

れなかつたら、キリストの沾券にかかわるじやないか、とこりうわけだからです。主の恵み、憐れみのゆえにです。これは皆さんについても全く同じです。ですからわたくしも主のみ国で皆さんに会えることを心から信じて、その非常に大きな輝きの上で皆さんに会えることを期待しています。「天国に行けなかつたらキリストの沾券にかかわる」というのですね。いかにも鈴木先生らしいと思います。鈴木先生は、神さまの恵み、あわれみがわたしたちみんなにおよんでいると、キリストと出会えると言つて旅立たれました。キリストと出会える、キリストの日に備えて今日を生きるのですね。これは、イエス・キリストを信じて、イエス・キリストに従つて、イエス・キリストの愛にならつて今を生きるということあります。

この年、わたしたちの思いもつかない色々なことを経験させられることでありますようけれども、私は今年の初めに、キリストの日を信じて、色々な時を、一日一日を、真摯に生きたい、そういう信仰生活を「一緒に歩みたい」と心から願っています。